

小学校若手教員育成研修の取組について

—主体的・協働的な学び合いによる2年目教員の資質・能力の向上を目指して—

研修企画係 指導主事 廣野 泰清

HIRONO Yasukiyo

要 旨

小学校若手教員(2年目)の授業力を中心とした資質・能力の向上を図るため、大学との連携を行いながら、「令和2年度小学校若手教員育成研修」に取り組んだところ、個々の授業力や授業力向上への意識を高めることができた。ICTを活用した同期の教員との協働による研修は、多くの受講者に学び合いの機会を提供でき、授業力を中心とした資質・能力の向上を図ることに大きな役割を果たせたと考える。

キーワード： 若手教員研修、大学との連携、授業力向上、ICT活用、協働

1 はじめに

近年の学校現場では、ベテラン教員の大量退職と新規採用教員の大量採用により、多くの学校で年齢構成の不均衡化が進んでいる。さらに昨今の課題となっている教員の多忙化等の影響もあり、これまで若手教員の育成を支えていた、長年の教員経験を基にしたベテラン教員による指導の機会が減少し、若手教員を学校内で育てていく体制が十分に機能しにくくなっている。

一方で、大量採用された新規採用教員の多くは学級担任を受けもっており、授業力はもとより、生徒指導力や適切な保護者対応力等の早急な育成が必要となる。

このような背景を踏まえ、高い授業力、豊かな同僚性、ひたむきな向上心をもった教員の育成を目的として、独立行政法人教員研修センター(現教職員支援機構)委嘱事業である教員研修モデルカリキュラム開発プログラムとして、平成27年度から「奈良教育大学との連携による小学校若手教員育成研修システム開発事業」と称した取組をスタートさせた。

平成27年度から平成30年度までは、県内5校を拠点校とし、拠点校に所属する新規採用から2年目の若手教員を中心に授業研究等の取組を進めた。拠点校の教員同士が協働して授業づくりに取り組む研修を日常的・長期的に行い、研究授業を実施し、校内研修との共催も積極的に行っていく「縦へのひろがり」と、2年目教員同士が集合型研修で授業づくりをしたり、研究授業の映像や研究協議の記録を、教育研究所Webサイトで公開したり、最寄りの拠点校において公開授業参観、研究協議に参加したりする「横へのひろがり」に努めつつ、県内若手教員全体の資質・能力の向上を目指した。その結果、これらの取組を通して、拠点校に所属する若手教員には授業力の向上や、スキルアップに対する若手教員の意識の向上が成果として見られたものの、それ以外の若手教員の多くは、何度も研究授業に取り組む拠点校に所属する若手教員に比するほどの資質・能力の向上には至らなかった点が課題として挙げられた。

このことから、令和元年度からは、多くの2年目教員がより直接的、実践的に授業づくりに関

わることができるよう、拠点校を中心とした仕組みを廃止し、県内2年目教員を六つの教科等グループ（国語、社会、算数、理科、道徳、外国語・外国語活動）に分け、それぞれのグループが協働して授業づくりを行う仕組みに変更した。（資料参照）

奈良教育大学とは引き続き連携を図り、各教科の専門教員による指導や大学に研究授業をWeb中継し、学生と交流する等の取組を行った。また、令和2年度については新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のために、令和元年度の取組にさらに変更を加えて実施した。

2 取組の実際

(1) 取組の概要

本研修は2年目教員を対象としており、教育研究所が実施する「初期研修（2年目）小学校」（以下「2年目研修」という。）と関連付けて行う研修と、奈良教育大学教員及び教育研究所指導主事が研究授業者の学校を訪問して行う授業校研修の二つの研修を行うこととした。

研修を始める前段階として、初任者研修の期間中に研修内容を十分に説明し、それぞれの希望を基に六つの教科等グループに分け、研究授業者を決定した。2年目に入ると、各教科等グループごとに模擬授業者や研究授業に向けた協議の記録等の役割を決定した。3回の教育研究所での研修と、2回の各授業校での研修を通じて、2年目教員が教科等グループごとに授業づくりを協働して行い、研究授業につなげた。各グループには、それぞれの教科等の専門に合わせて奈良教育大学教員、教育研究所指導主事が、適宜、指導助言を行った。この仕組みにより、平成30年度までの拠点校を中心とした取組に比べて、2年目教員全員が授業づくりに関わることとなり、実践的に研修に取り組むことができるようになったと考える。

(2) Webサービスの活用について

本研修で実施した模擬授業や研究協議の記録、研究授業指導案等の受講者全体に伝えたい内容については、令和元年度までは教育研究所のWebサイトに掲載することで情報共有を行っていたが、令和2年度からは、奈良県域で導入したGoogle Workspace for Educationの「Classroom（以下Classroomという。）」を活用して共有を図った。これにより、クラウド環境で随時研修内容を振り返ることができるとともに、事前に学習指導案を熟読して研究授業を参観することや他教科等の学習指導案や記録を閲覧することも可能となり、学びの「横へのひろがり」に役立つと考えた。また、Classroomについては、2年目研修全体のClassroomと、教科等グループごとのClassroomを作成した。全体のClassroomには全ての教科等グループの学習指導案や記録を掲載し、各教科等グループのClassroomは、模擬授業の学習指導案や授業校研修の様子や連絡事項の共有を図るために使用することとした。

(3) 取組の流れ

令和元年度は、教育研究所で行う研修は全て教育研究所に集合する形で実施し、研究授業についても、研究授業校に各教科等グループ全員が集合し、研究授業を参観後、研究協議を行った。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、夏期休業中の研修は遠隔研修で実施した。研究授業については、大学教員と担当指導主事のみが当該校で参観し、担当指導主事が研究授業を記録、撮影した。研究協議は、2学期後半に各グループ全員が教育研究所に集合して、編集した動画を視聴後、協議を行う形で実施した。

第1回 6月～7月 （授業校研修 各研究授業校）

- ・担当者顔合わせ、研究授業の方向性及び単元等の決定、今後の日程調整

第2回 7月29日 (2年目研修1日目 遠隔研修にて実施)

- ・研究授業者による方向性の提案、各教科グループ分け、模擬授業者等の担当決定、模擬授業内容の検討
- ・模擬授業学習指導案の作成(全員) → 各教科等グループのClassroomに掲載

第3回 8月5日 (2年目研修2日目 遠隔研修にて実施)

- ・模擬授業に向けての学習指導案の検討

第4回 8月21日 (2年目研修3日目 各教科等グループの模擬授業者と研究授業者のみ教育研究所に来所、それ以外は遠隔研修にて実施)

- ・模擬授業及び研究協議、研究授業に向けた協議(図1、2)



図1 模擬授業



図2 研究協議

- ・2年目研修3日目の記録(各グループ記録係) → 2年目研修全体のClassroomに掲載

第5回 10月～11月 (授業校研修 各研究授業校)

- ・事前授業の参観、指導助言、奈良教育大学教員及び指導主事による研究授業に向けた学習指導案検討及び協議

第6回 11月～12月 (授業校研修 各研究授業校)

- ・研究授業(動画撮影)、研究授業を大学にWeb配信、奈良教育大学の学生と意見交流(図3)



図3 大学生との意見交流



図4 事後の研究協議

第7回 11月～12月

(2年目研修4日目 教育研究所)

- ・研究授業動画の視聴、研究協議、奈良教育大学教員及び指導主事による指導助言(図4)
- ・2年目研修4日目の記録(各グループ記録係) → 2年目研修全体のClassroomに掲載(図5)

各教科研究授業指導案	
道徳 2年「オレンジ色の木のみ」	投稿日: 2020/12/21
理科 3年「電気であかりをつけよう」	投稿日: 2020/12/21
国語 2年「お手紙」	投稿日: 2020/12/21
音楽 5年「割合」	投稿日: 2020/12/21
外国語活動 3年「What do you like?」	投稿日: 2020/12/21
社会 6年「武士による政治の安定」	投稿日: 2020/12/21
最終日の記録	
道徳時の記録	資料番号: 2020/12/28

図5 2年目研修全体のClassroomの一例

(4) 研究授業について

ア 国語グループ（葛城市立忍海小学校 2年生 図6、7）

単元名 読んだかんそうをつたえ合おう

教材名 「お手紙」

本時の目標 二人ともとても幸せな気持ちになったわけを話し合うことを通して、二人の心情の変化を読み取ることができる。



図6 前時までの内容を教室に掲示



図7 全体での意見交流

イ 社会グループ（斑鳩町立斑鳩西小学校 6年生 図8、9）

単元名 武士による政治の安定

本時の目標 島原・天草一揆について、幕府と百姓のそれぞれの立場に立って考え、幕府がキリスト教を厳しく取り締まった理由を理解する。



図8 実物を使った導入



図9 グループで考えを共有、整理

ウ 算数グループ（葛城市立新庄小学校 5年生 図10、11）

単元名 割合

本時の目標 基準量、比較量、割合の関係を正しく捉え、解決した結果の根拠を考え、説明する。



図10 生活に関連した題材の提示



図11 グループで課題解決

エ 理科グループ（広陵町立広陵東小学校 3年生 図12、13）

単元名 電気で明かりをつけよう

本時の目標 豆電球に明かりがつくときとつかないときの実験結果を比較し、それらを考察し、自分の考えを表現する。



図12 ロイロノートで実験結果を報告

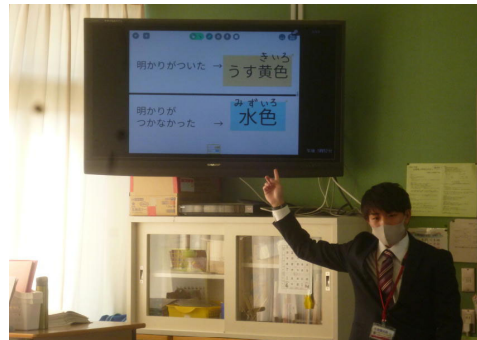


図13 結果を大型モニターで確認

オ 道徳グループ（檀原市立畝傍北小学校 2年生 図14、15）

主題名 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にすること C-(12)規則の尊重

教材名 「オレンジ色の木のみ」

本時の目標 きまりを守ることができなかった子鹿のマークンや友達の気持ちを考えることを通して、よりよい生活を送るために約束やきまりを守ろうとする態度を育てる。



図14 工夫された黒板掲示



図15 友だちと考えを交流

カ 外国語・外国語活動グループ（檀原市立真菅小学校 3年生 図16、17）

単元名 What do you like?

本時の目標 身の回りのものについて、What do you like?やI like ~.などの表現を用いて好きな物を尋ねたり答えたりすることに慣れ親しむ。



図16 児童による会話の見本



図17 楽しいアクティビティ

3 取組の結果と考察

(1) 事前・事後調査結果の分析と考察

ここでは、取組の事前・事後に受講者に対して実施したアンケート調査の結果から、本研修の成果や課題につながる点について考察する。

〈小学校2年目教員を対象とした事前・事後調査の概要〉

- ①調査場所・・・奈良県立教育研究所
- ②調査時期・・・事前：令和2年7月22日、事後：令和2年11月～12月
- ③調査対象・・・事前：2年目教員92人、事後：2年目教員90人

注) グラフ中の数値の単位は全て%。「事前」は事前調査、「事後」は事後調査を示している。

「授業力が身に付いている」の設問に、「はい」、「どちらかといえば、はい」の肯定的回答が取組前から約22ポイント増加している(図18)。受講者は授業力の向上のために1年間真摯に研修に取り組み、様々な授業に関する知識や方法を学んだことで、授業力向上についての手応えを感じることができた。ただし、30%以上の受講者が否定的回答をしていることは令和3年度に向けての課題である。また、「1時間の授業展開を考える」については、肯定的回答が取組前から約11ポイント増加している(図19)。受講者全員が協働して授業づくりに関わることができたことの成果ではないかと考える。

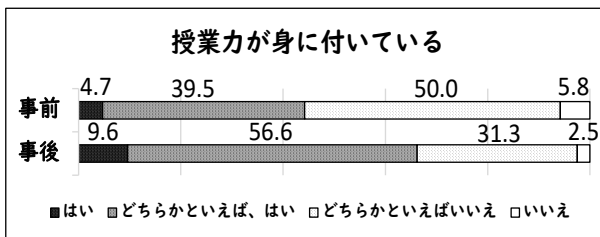


図18 授業力の定着について

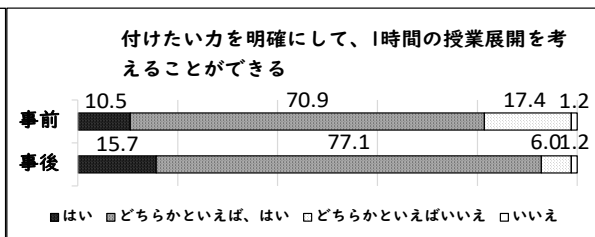


図19 1時間の授業展開について

「単元全体の授業構成を考える」については、肯定的回答が約5ポイントの増加にとどまった(図20)。研究授業に向けた協議の時間に大半の時間を設定したため、研究授業を行う1時間の授業のみに協議が偏ってしまい、単元全体を見据えて授業づくりを協議するところまでは至らなかったのではないかと考える。「活動内容や活動形態を工夫することができる」については約10ポイント増加しており(図21)、活動内容や活動形態の考えの幅が広がり、受講者の自信を深めることにつながる実践的な研修となったことが分かる。

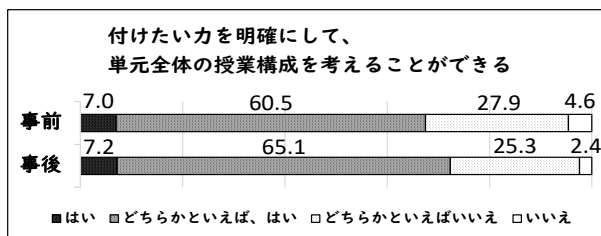


図20 単元全体の授業構成について

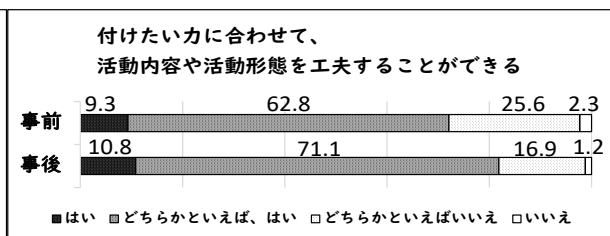


図21 活動内容や活動形態について

「主体的な学びや対話的な学びを取り入れた授業づくりをしている」については、取組前と比べると肯定的回答が約19ポイント増加し、2年目教員全体の70%を超えている(図22)。30%弱の受講者が否定的回答をしているが、図23を見ると、全ての受講者が「主体的な学びや対話的な学びを取り入れた授業」を増やしたいという意欲をもっていることが分かる。また、取組前後で

大きな変化はなく、2年目教員が日頃から「主体的な学びや対話的な学びを取り入れた授業」の重要性を意識していることがうかがわれる。今後も「主体的な学びや対話的な学びを取り入れた授業づくり」を重視した研修内容を構築していく必要があると考える。

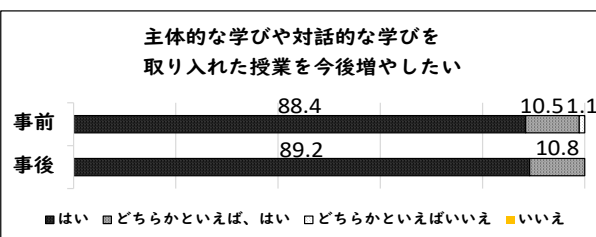
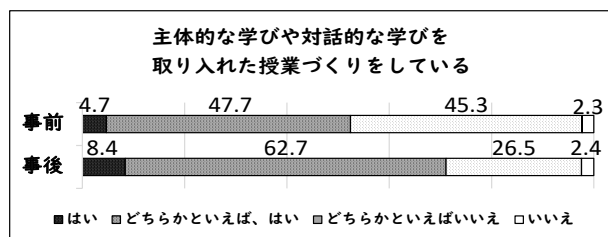


図22 主体的・対話的な学びの授業づくりについて 図23 主体的・対話的な学びを増やすことについて

図24、図25については、授業づくりに関して、他の教員と協働したり、校外研修に参加したりすることに関する質問項目である。事前調査ではともに肯定的回答が多数であるが、事後調査では「どちらかといえば、はい」の割合が減少し、「はい」と答えている回答が約12ポイント以上増えている。本研修を通して、他の教員と協働すること、校外研修に参加し、視野を広げることの意義を再確認できた受講者が増えたと考える。

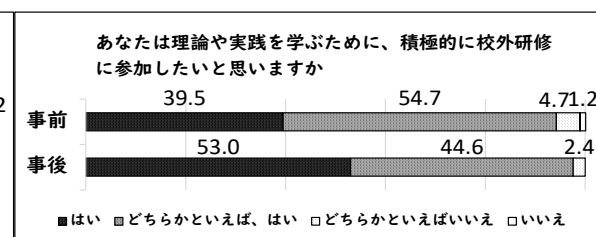
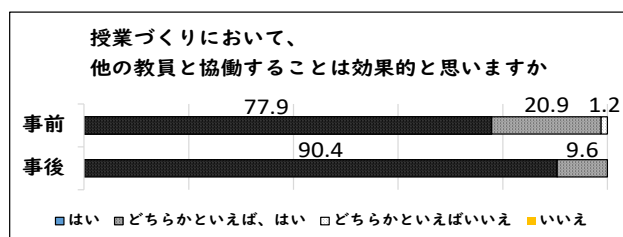


図24 他の教員と協働する機会について 図25 積極的な校外研修への参加について

図26、27は、「授業力向上への意識」に関する質問項目である。「研究発表・公開授業への積極性」では約11ポイント肯定的回答が増えた(図26)。また「継続的な授業力向上への取組」ではほとんどの受講者が肯定的回答をしている(図27)。本研修を通して、受講者は、同期の先生の研究授業や模擬授業を見ることで、自分も積極的に研究発表や公開授業をしたいという意欲が高まっていると考えられる。

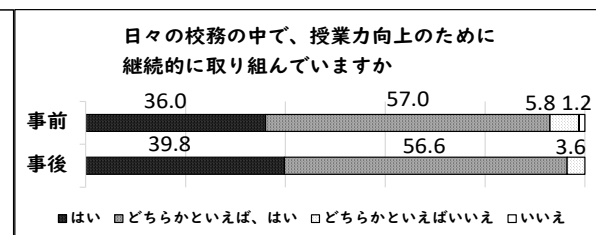
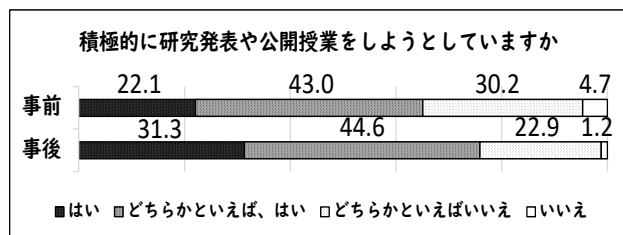


図26 研究発表・公開授業への積極性について 図27 継続的な授業力向上への取組について

図28は、受講者のWeb活用の状況に関する質問項目である。令和元年度は、受講者が教育研究所のWebサイトにアクセスする形で学習指導案等の情報を共有していたが、令和2年度はClassroomを使用して情報共有を図った。結果、アクセス回数は大幅に増加し、令和元年度の課題であったアクセス数が0回という受講者はいなくなった。。また、10回以上アクセスしたという受講者が60%を超え、クラウド上で情報共有をスムーズに行うことができたと考える。図29は、Web上にアップされた資料をどの程度視聴したかについて、自分が選択した教科と他教科で比較した

ものである。自分が選択した教科については、ほとんどの受講生が「ほぼ見た」、「半分見た」と回答しているが、他教科については、「ほぼ見た」、「半分見た」という回答は44.6%と低かった。多忙な校務の中で、他教科等グループまで確認することは難しいのかもしれない。令和3年度は、更にICT等を活用しながら、他教科等の情報を受講者が手軽に確認できる仕組みを構築できないか検討していきたい。

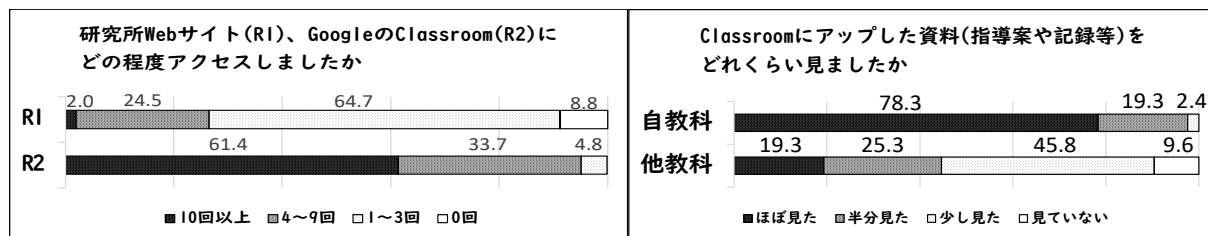


図28 Webサイト等へのアクセス数の比較について 図29 Classroomの資料閲覧の比較について

図30、31は令和元年度と令和2年度のWeb活用の有効性に関する質問項目であるが、令和元年度は肯定的回答が63%だったのに対して、令和2年度は96.3%となっており、大幅に肯定的回答が増加した。理由としては、Classroomが受講者にとって、スマートフォンのアプリ等でも気軽にチェックできる、身近で利便性の高いツールとなり、遠隔研修でMeetによる講座受講に際しても必ずアクセスする必要があることが大きいと考える。

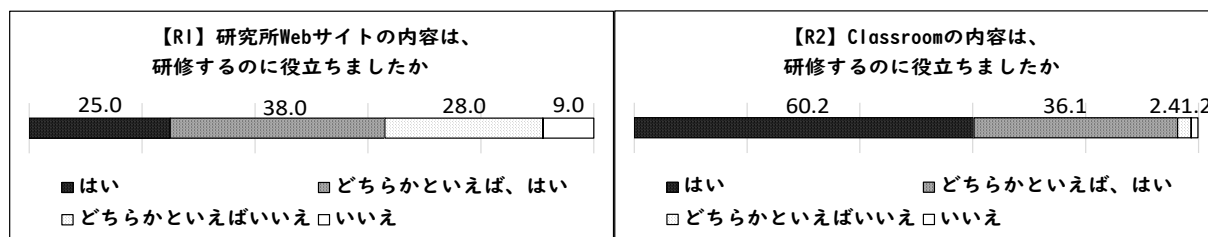


図30 Webサイトの有効性について(R1)

図31 Classroomの有効性について(R2)

(2) 成果と課題

研修後のアンケート調査の自由記述からは、「同期の先生方と研修を行ったことで、アイデア・引き出しが広がったように感じる。やはり、ねらいを明確にもってそれを軸に授業を構成することは非常に重要であると感じた。日々の授業でも意識していかなければと改めて気合いが入った。」「同じ年代の先生方と協議する機会は日常ではあまりないので、自分にとってとても意義のある研修になった。日々仕事に追われ、教材研究が納得いくまでなかなかできない時もあったが、他の先生方の研究授業を拝見して、自分ものり込むほどしてみたいと思った。」等の感想があり、自らの授業力を高めたいという受講者の意識の向上が感じられた。本研修を通して行った同期の教員との協働による研修は、多くの受講者に学び合いの機会を提供でき、授業力を中心とした資質・能力の向上を図ることに大きな役割を果たせたのではないだろうか。

また、Classroomを活用して、情報共有を頻繁に図ることができたことも大きな成果と言える。研修を受講するためには、Classroomに掲載されている開催要項や資料のチェックは必須であり、必ず確認するものという意識ができたことと、Classroomに学習指導案等を掲載すると必ず受講者にメールが届き、個別に受講者に知らせることができたこと等が成果につながったと考える。

課題としては、全研修日数が4日間と限られていることから、授業づくりでは研究授業者中心に進めざるを得なかったことが挙げられる。加えて、令和2年度は新型コロナウイルス感染症感

染拡大防止のため、夏期休業中の研修を遠隔研修で実施したため、各教科等グループ内での意思疎通や授業づくりの話合いが十分にできなかった面が否めない。受講者からは、「若手教員育成研修だけではないが、自分自身がどれだけ学ぼうとするのかが重要であるように感じた。本来であれば、学ぶしかない環境におかれるのが研修であるが、今回は新型コロナウイルスの影響もありリモート研修が多かった。そこでは、言葉は悪いが手を抜こうと思えば抜くこともできる。」

「情勢を鑑みると仕方がないが、オンライン上でしか顔を合わせることができず、模擬授業や研究授業については、いささか授業者任せっぱなしな部分が多くなってしまったようにも感じる。」といった意見も多数あり、従来型の集合型研修のメリットを再認識した。新型コロナウイルスについては収束の兆しが見えない状況であるが、より受講者全員が主体的に授業づくりに関わるためには、2年目研修以外の場面でも情報交換できる場の設定が重要になるのではないかと考える。中には、自分たちでSNS等を活用して情報交換しているグループも見られた。今後はMeetを利用してオンラインミーティングを円滑に運用したり、共同編集機能を利用して、グループ全員で学習指導案等のファイルを編集したりと、ICT等を更に活用し、受講者全員が主体的、協働的に授業づくりに関わる研修を実施していくことが重要であると考えます。

4 おわりに

本研修は、令和元年度から大きく内容を変更し、受講者全員が協働的、実践的に授業力向上に向けた研修に取り組むことのできる仕組みに変更し、実施した。また、令和2年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、多くの研修で遠隔研修を取り入れるなど、臨機応変に内容等の変更を加えながら実施した。集合研修が困難な状況下で、Google Workspace for Educationのアプリを活用し、令和元年度と同等の成果が得られるように取り組んだ。制限のある中、受講者は熱心に研修に取り組み、個々の授業力向上への意識を高めることができたこと、遠隔研修のメリット、デメリットを体感することができたことは大きな成果である。令和3年度は令和2年度と同様の研修を継続して行うが、令和2年度の成果と課題を踏まえ、より協働的、実践的な研修となるよう検討しながら進めていきたい。